

◆2021年7月第2週の説教

■日時：2021年7月11日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「罪からの救いを求めて」

■聖書：新約ローマの信徒への手紙7：18－25（p283）

■讃美歌：218「日暮れてやみはせまり」・404「あまつましみず」

お早うございます。

改めて触れる必要もないと思いますが、明日から4度目の緊急事態宣言が発令されることになり、8月の22日（日）まで続きます。昨年4月の第1回宣言から始まったオンラインによる礼拝は、いったん6月には終えて、対面での礼拝を再開しましたが、今年1月から再びオンラインによる礼拝に戻りました。それでも、本当にようやく先々週から態勢を整えて教会活動を少しずつ復活させようとしていた矢先、又、オンラインによる礼拝に戻ることとなります。

このニュースを知った先週、ふと思ったことがあります。今年の1月から今まで、私たちは皆集まっただけの礼拝を神様に捧げることが出来ないでいます。そしてこの状態はあと1カ月続きます。他の教会も同じです。その意味は何かと考えたのです。

確かに、オンラインであっても、礼拝は休むことなく続けることが出来ました。

しかし、コロナの感染を心配することなく、以前のように皆一緒に、精一杯讃美し、祈り、御言葉に耳を傾ける礼拝は許されていないのです。

試されていると思いました。

今、この時、神様は私たちの信仰を吟味しているのではないかと。

私たちの信仰がどれだけ真実であり、神様と共に在ること、神様に導かれて歩むことを望んでいるのかということなのです。

礼拝は続けていますが、教会のもう一方の柱である聖書研究・祈祷会は休みとなっています。知人の教会の多くは、パソコンのZOOM機能を使って祈祷会を行っていますが、私た

ちの教会ではまだその準備が出来ていません。しかし、祈祷会のない教会活動など有り得ず、たとえ集まることは出来なくとも、私たちは月曜から金曜までの毎日、その日に記されている教会員及び関係者を覚えての祈りが行われています。

神様は、信仰者としてこの試練の時を過ごしている私たちの日々のそのような姿を見続けておられると思います。

緊急事態宣言が解除された後の8月23日から、私たちは定例集会を再開します。

8月25日（水）午前10時半から始まる聖書・研究祈祷会が集まりの最初です。

まだ1ヵ月半ほどありますが、再開の日に備えて、再び心の準備を始めたいと思います。

それでは、今日与えられた聖書の御言葉を見てまいりましょう。

ローマの信徒への手紙を学び始めてから6週間が過ぎ、来週には早くも全体で16章あるローマ書の半分を終わることになります。

昨年、初めて試みたマルコによる福音書の講解説教では、1章を2回に分け、全てを読み通して学びました。しかしい、今回のローマの信徒への手紙では、毎回1章ずつ、その中でも重要と思われる箇所限定しての学びになっています。マルコの時のように全部を読み通しての学びではありませんが、使徒パウロの信仰者として歩んだ道をしっかり辿って行きたいと思っています。

18節から見て行きます。

この箇所は、パウロの書いた数ある手紙の中でも良く知られ、パウロの信仰を理解するにあたって大切な箇所の一つです。

18：わたしは、自分の内には、つまりわたしの内には、善が住んでいないことを知っています。

善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。

ダマスコ途上において復活のキリストに出逢い、悔い改めを経験しつつ、なお、パウロは

このような告白をしています。善を行いたい、でも自分にはその善を行う力がないと言うのです。

パウロのこの告白は、私たちの心を打ちます。あの大パウロにしても、このような戦いをしているのかとの思いです。もし、パウロの宣教が無ければ、キリスト教はユダヤ教の中

の一つのグループに過ぎず、福音は、異邦人である私たちのもとにまで届くことはありません

でした。パウロは、文字通り、迫害に遭いながらも、全身全霊を傾けて主イエス・キリス

トの福音を宣べ伝えました。彼自ら記しています。

コリントの信徒への手紙二、第 11 章 23 節から 27 節、新共同訳聖書の 338 頁です。

「(福音を宣べ伝えるために) 苦労したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、

鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。

ユダヤ人から 40 に一つ足りない鞭を受けたことが 5 度、鞭で打たれたことが 3 度、石を

投げつけられたことが 1 度、難船したことが 3 度、一昼夜海上に漂ったこともありま
した。しばしば旅もし、川の難、盗賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒
れ野

での難、海上の難、偽の兄弟たちからの難に遭い、苦勞し、骨折って、しばしば眠らずに
過

ごし、飢え渴き、しばしば食わずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」

一体何のためにパウロはこれらの苦難に遭ったのでしょうか。

それは、パウロが出会った復活の主イエス・キリストを宣べ伝えるためです。

福音宣教の第一任者であるパウロは、しかし、それにもかかわらず、自分の現実を赤裸々に告白するのです。19 節、

19：わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている、と。

そして、そのような己の現実に目を留め、次のように述べます。20 節です。

20：もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたし

ではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。

パウロにとっての罪、それは神様からの呼びかけに背を向けることでした。

エデンの園で、神様から食べてはならないと命じられていた善悪の知識の木の実を食べ、神様に背いたアダムとしての自分を自覚することでした。

そして、そのような自分の現実に見つめる時、21 節です。

21：それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気が

つきます。

この付きまとっているという言葉の原語の意味は、居座っているということです。

自分の中に、悪が居座っているのです。

そして、22、23 節、

22：「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、

23：わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にあ

る罪の法則のとりこにしているのが分かります。

律法、それは本来神様から与えられた祝福の基（もと）です。

モーセに与えられた十戒は、その戒めを守ることによって、神様から祝福が与えられることが約束されていました。

「内なる人」、つまり神様に従うことによってその祝福を受けることを望む霊的な自分は、神様から与えられた律法を喜んでいる。しかし、私の肉体である5体、即ち頭や手や足などは、神様からの呼びかけに背を向け、自分の欲望に従って思いのままに歩いてしまうと言うのです。そのような自分とは、24節です。

24：わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたし

を救ってくれるでしょうか。

パウロの痛切な叫びです。

全身全霊を傾け、福音宣教のためにはどのような苦難にも耐え、行動し続けるパウロでさえ、己の罪との尽きざる戦いの現実がありました。いや、より正確に言えば、全身全霊をもってキリストに従い行こうとするパウロだからこそ、己の罪への自覚が誰よりも深くなったのです。

それは、私たちにも理解出来ることだと思います。

まだ神様との出会いを経験していなかった時、私たちは罪と言う問題についての自覚は決して深くはありませんでした。しかし、イエス様の十字架の意味を知らされた時、私たちは己の罪と言う問題に向き合わなければなりません。自分の心の内に内在する罪への自覚なくして、イエス様が十字架に架けられた意味を理解することが出来なかったからです。

ましてや、復活の主に出会う前のパウロは、イエス様に従う者たちに対する敵意を抱き、

次々に捕らえ、牢獄へと引き立てる迫害の急先鋒に立っていました。

そのような行動へと駆り立てていたパウロの信仰とは、神様から恵みとして与えられていた律法の本来の意味を転倒させ、律法を守ることによって神様の義を得る、即ち神様になり代わって自分で自分を義としていたのです。

恐らく、先ほど述べたような、襲い来る試練のただ中であって、一步も引く事無く福音宣教の業を押し進めて行くパウロにとって、試練が厳しければ厳しいほど、己を義とする想い、即ち罪が頭をもたげるのです。試練を乗り越えれば、それだけ神様の祝福が増し加わると言う、自分を義とする思いです。しかしそのような思いこそが、罪に囚われていることであり、死に定められた体であることを意味したのです。

しかし、そのようなパウロであるにもかかわらず、一方、パウロには確かに知らされてきました。主イエス・キリストの救い、罪からの解放、そして死に対して勝利した復活の事実です。

罪に支配されている己の肉体を嘆きつつも、それだからこそ、神への感謝が心の奥底から迸（ほとばし）りでるのです。

25 節。

25：わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし

自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。

使徒パウロの実存が余すところなく記されているこの箇所は、キリストに従い行こうとする私たちにとって、慰めであり、又励ましでもあります。

あの、使徒パウロにしてもそうであったのかと。

但し、私たちは、同時に、安易にこの箇所を受け止めてはならないと思います。

パウロが直面した試練の数々、又その試練を乗り越えるにあたってのパウロの戦いがどれほど厳しいものであったかを知ることが出来ないからです。

その戦いは、私たちの想像をはるかに越えます。40 に一つ足りない鞭とは、あと一つ、40 に達すれば、その人は死ぬことを意味しています。

石を投げつけられるとは、石打ちの刑を意味します。

盗賊の難に遭うとは、瀕死の重傷を負うことです。

まさにパウロは、幾たびも死に瀕しつつ、福音宣教の旅路を歩み続けました。

そして、パウロは、試練に遭うごとに己に尋ねたと思います。

自分は一体何のために、このような苦しい目に遭っているのかと。

又、試練を乗り越える度ごとに、神様に感謝しつつも、己を義とする罪からの誘惑にかられたと思うのです。

25 節は、そのようなパウロの苦しみ、心の葛藤を経ての神様への感謝だと言うことを、心に深く覚えたいと思います。

そして、私たちは、このような罪との絶えざる戦いを戦いつつあるパウロのキリスト賛歌、神への賛歌を幾つも知っています。

その中の1つを選び、今日の学びとしたいと思います。

ガラテヤの信徒への手紙 2 章 19 節から 20 節 (p345)

「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」

肉において死に、霊において生きるパウロの姿であり、又私たちの姿です。

祈りましょう。